

令和6年度
学術研究助成成果フォローアップ調査

調査結果報告書

(概要版)

令和7年3月

公益財団法人 ひょうご科学技術協会

調査の概要

1. 調査の目的

協会では、兵庫県における創造的な科学技術の振興を図るため、設立以来32年間にわたり、科学技術に関する学術研究に対する助成を行ってきた。

本調査は、その助成研究が、①どのような研究成果を挙げ、その成果が学界や一般社会等でのような評価を得ているか、②また、助成研究がその後どのような研究に発展し、学術水準の向上や研究者の育成にどのように寄与しているか、③さらには、生活や産業の高度化にいかなる波及効果を及ぼしているか等、研究助成の成果を調査して取りまとめることを通じて、当事業のPR、学術研究助成事業の今後のあり方等を考究することを目的とする。

2. 調査方法

①目的

調査全体の目的に沿って、助成を受けた研究者にアンケート調査を実施し、成果の実情を把握する。

②調査対象

調査1：助成後 2年目 令和 4年度に助成を受けた研究

調査2：助成後 5年目 令和 元年度に助成を受けた研究

③アンケート発送日

令和6年8月1日

④アンケート回答期限

令和6年9月30日

⑤アンケート回収状況

アンケート発送数 68件

うち返戻数 5件

差引有効調査数 63件

アンケート回答数 52件（回収率82.5%）

⑥アンケート回答者等の内訳

●調査対象・回答数内訳

	助成研究実施年度	発送数	回答数
調査1	令和 4年度（ 2年目）	33	28
調査2	令和 元年度（ 5年目）	35	24
合 計		68	52

調査項目一覧

調査項目	調査対象	
	【調査1】 R4	【調査2】 R1
I 「助成対象となった研究」 結果の発表・引用及び反響について 1. 研究結果の発表実績 2. 論文発表件数 3. 口頭発表件数 4. 研究結果の引用実績 (引用論文の調査手段)・・・【調査1】のみ 5. 研究結果の反響や評価	○	○
II 波及・発展した(その後の研究) 結果の発表・引用及び反響について 1. 研究結果の発表実績 2. 論文発表件数 3. 口頭発表件数 4. 研究結果の反響や評価	○	○
III 「助成対象となった研究」又は「波及・発展した研究」 の成果について 1. 学術面での成果 2. 生活・産業面での波及効果	○	○
IV 当助成制度の意義、問題点について 1. 助成の意義 2. 助成金額の妥当性・・・【調査1】のみ 3. 当助成制度の問題点、改善意見 4. 当調査に対する意見 5. 当協会に対するその他要望	○	○

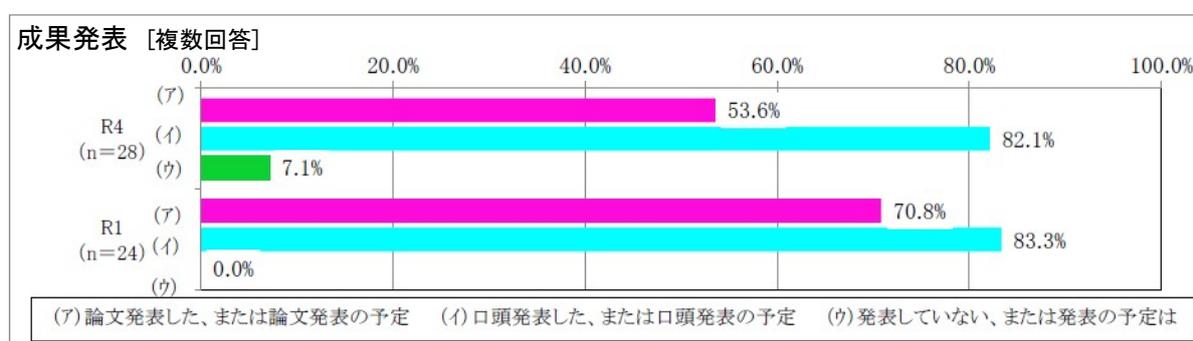
調査結果概要(抜粋)

I 「助成対象となった研究」 結果の発表・引用及び反響について

II 波及・発展した(その後の研究) 結果の発表・引用及び反響について

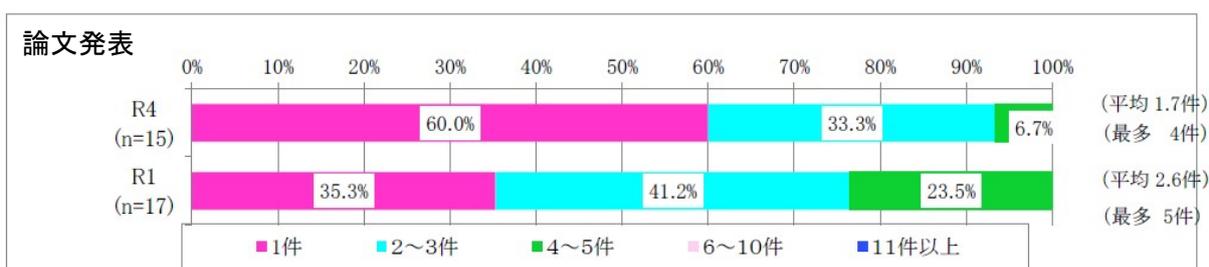
1. 研究成果の発表実績

- 助成を受けた研究者のうち、予定している案件を含めて、論文発表した研究者は「R4」が 53.6%、「R1」が 70.8%、口頭発表した研究者は「R4」が 82.1%、「R1」が 83.3%。
- 論文発表と口頭発表の両方を行った研究者は 48.1%と 5 割近い。



2. 論文発表の実績

- 1 研究当たりの発表件数が 3 件以下の研究者が全体の 8 割を超える (84.4%)。
- 回答者の平均発表件数は 2.2 件、最多は 5 件。
- 助成年度別の平均発表件数は、「R4」が 1.7 件、「R1」が 2.6 件。
- Journal of Synchrotron Radiation など著名書誌への発表事例があった。



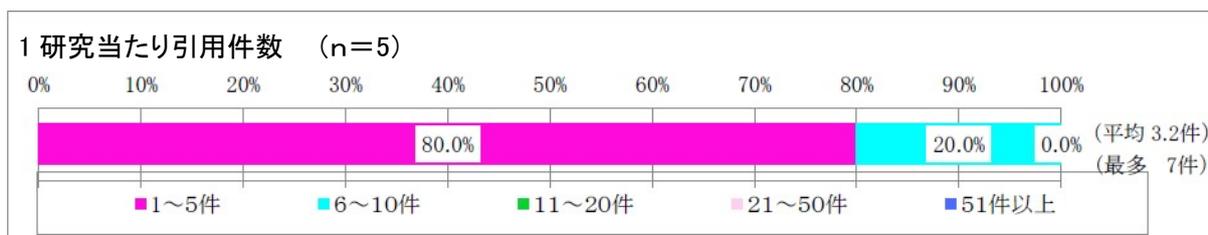
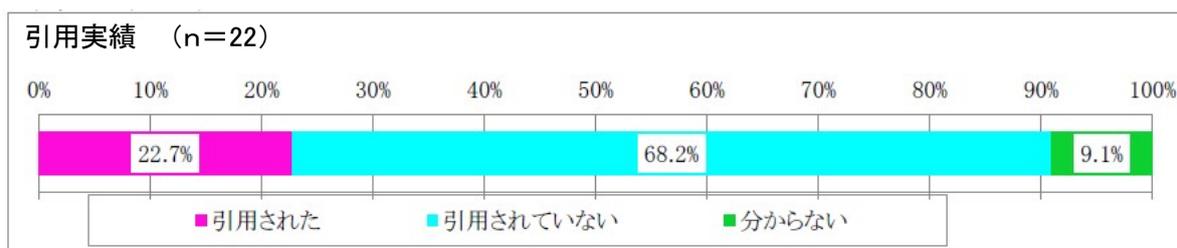
3. 口頭発表の実績

- ・ 1 研究当たりの発表件数が 3 件以下の研究者が 5 割以上を占める (55.8%)。
- ・ 回答者の平均発表件数は 5.3 件、最多は 30 件。
- ・ 助成年度別の平均発表件数は、「R4」が 2.6 件、「R1」が 8.3 件。



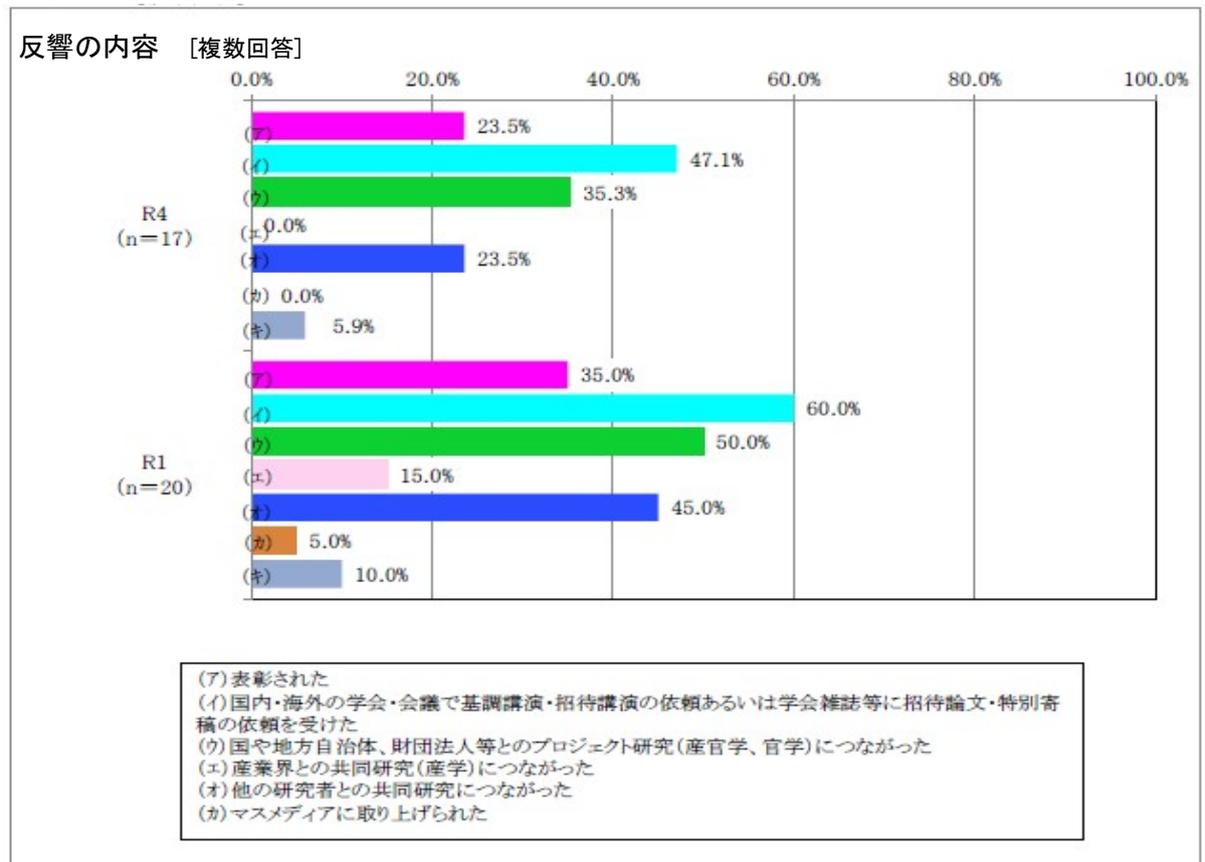
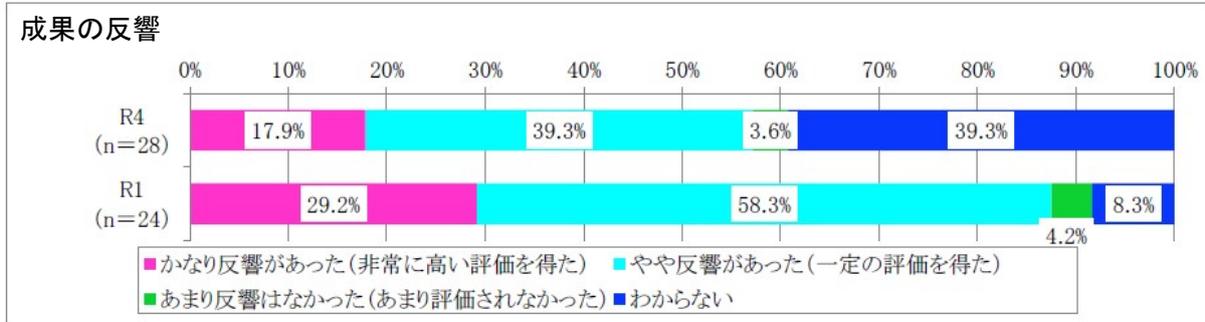
4. 引用の実績(R4のみ)

- ・ 助成研究論文の約 2 割が他の学術誌で引用されている (22.7%)。
- ・ 「引用された」研究者の平均引用件数は 3.2 件、最多は 7 件。
- ・ International Review of Cell and Molecular Biology. など著名書誌への引用事例があった。
- ・ 引用論文の調査手段は、「Google Scholar」が 69.2% で最も多い。



5. 研究成果の反響や評価

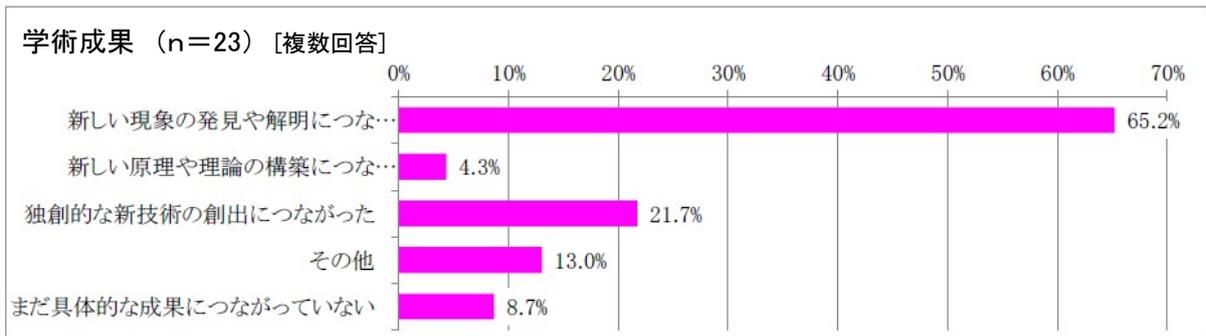
- ・ 反響があったとする研究者は約 7 割 (71.2%)。
- ・ 反響があった研究者のうち、「R4」は、「学会等での講演依頼を受けた」の項目が 47.1%と最も多く、次いで「プロジェクト研究や、産業界との共同研究につながった」35.3%、「R1」は、「学会等での講演依頼を受けた」の項目が 60.0%と最も多く、次いで「プロジェクト研究や、産業界との共同研究につながった」50.0%となった。



Ⅲ 「助成対象となった研究」又は「波及・発展した研究」の成果について

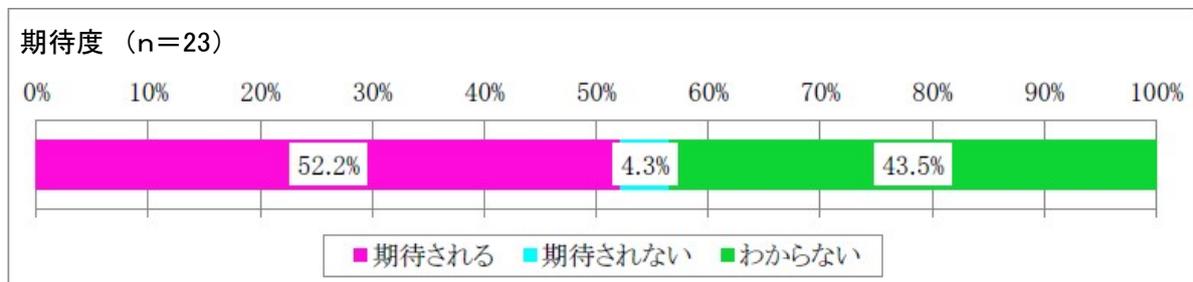
1. 学術面での成果 (R1 のみ)

- ・ 回答者の9割が「何らかの成果があった」としている。
 (「まだ具体的な成果につながっていない」という8.7%を除く91.3%)
- ・ 「新しい現象の発見や解明につながった」が65.2%など、助成対象となった研究から波及・発展した研究が着実な成果をあげていることがうかがえる。



2. 生活・産業面での波及効果 (R1 のみ)

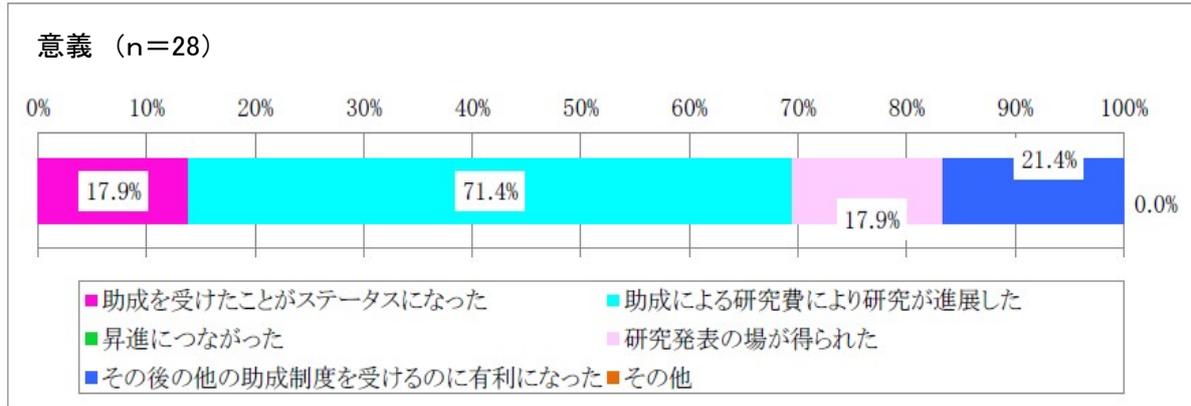
- ・ 5割以上が「期待される」と回答している (52.2%)。
- ・ 新製品・新技術の創出につながった事例を含め、生活向上につながる可能性があるなど、生活・産業面で有用な研究となっている。



IV 当助成制度の意義、問題点について

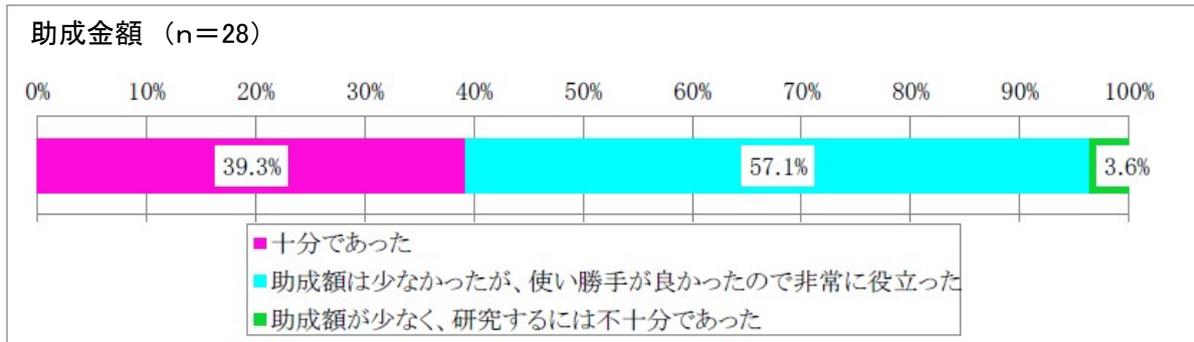
1. 助成の意義 (R4 のみ)

- ・ 回答者の 7 割が「助成による研究費により研究が進展した」としている (71.4%)。
- ・ 当助成制度に対する意見・要望においても、当助成の研究費が非常に助かったとの言葉が数多く寄せられており、資金面の援助が研究の進展に大いに役立っていることがわかる。



2. 助成金額の妥当性 (R4 のみ)

- ・ 「十分であった」は 39.3%、「使い勝手がよく役立った」が 57.1%となっており、助成金の有用性を評価する研究者が多い。



3. 当助成制度に対する意見・要望

- ・ オンライン申請を求める意見
- ・ 複数年に渡る助成や、助成金額の増額などの要望
- ・ 申請時期の見直しを求める意見 など

4. 協会への要望

- ・ 協会への謝意を含め、年齢制限のない当助成制度の継続や、更なる発展を望む意見が多数寄せられた。